



馬耳東風

第一線を離れ、専門分野の情報から遠ざかった今、雑音から逃れて趣味三昧の悠々自適な余生を送ってみたいと常々思っている。しかし、今の世の中、世間には様々な人間関係の軋轢があり、社会は様々な不条理な出来事で溢れている。今更、声を大きくして怒ったところでどうなるものでもないことは承知しているつもりだが、それらを諦観できるほど老境に入っていないと思っている。

21世紀の幕開けの年、繁栄の象徴であったNY世界貿易センタービルが航空機の突入攻撃を受けて崩壊するのを見たとき、当時の大量生産・大量消費・大量廃棄の流れが変わる転換点になるかとも考えたが、それは見事に外れた。世界の潮流は自国第一主義、利己主義傾向が益々強くなり、社会の連帯感が希薄化し、様々な紛争が増幅してきた。この20年間で欧米諸国ではGDPが20%程度も伸びているが日本ではほぼ横ばいである。そこに降って湧いたようにCOVID-19の流行に見舞われ、この間に大幅に伸びたのは富裕層と貧困層の格差と国債発行残高のみである。この現状を前に安穏としておられないと思うのだが、政治の世界にはその危機感はないように感じられる。残された時間が段々と短く感じる年齢に達した今、やはり若い人達の行く末の事が心配になる。永田町の常識が世間の常識と余りにも乖離し、政治が信頼を失った今、議員に求められるのは強い倫理観と国民に対する使命感それに責任感ではなかるうか。ドイツのメルケル首相の16年間の政治家としての言動から、物理学者らしく強い信念を持って難題を合理的に判断してきたように感じる。党利、利己を第一義的な行動規範

とし、哲学・理念は二の次に置いて居るとしか考えられない日本の政治家と比べて、優れた洞察力・説得力は際だっていたと思う。

若い頃から常に人生3分節、第1節：育成期、第2節：活動期、第3節：悠然期で考えてきた。人間の行動規範で重要なものは、社会に対する使命感と他者に対する思いやりと考えている。「教養無き専門家になるな」という高校教師の言葉を胸に半世紀近く、自分に課せられた使命を成就すべく、時には家庭を犠牲にして働いてきた。そして喜寿を過ぎた今、自分の来し方・行き方を思うとき、果たして家庭人として、社会人として課せられた役割を全うして来られたのか心許ない。かつて、ウルグアイのムヒカ大統領が「欲を出すから不幸になる、貧しい人とは限りない欲を持ち、いくらあっても満足しない人のことだ」と言った。この言葉は私たちが求めるべきは物質的豊かさではなく心の豊かさ、幸福と感じられる社会の実現であることを表している。

2008年7月号に拙著を掲載してから、今回で53回目の執筆になる。2010年に退職し、組織に束縛されない解放された立場に立っていると、様々な問題点が見えてくる。この間、思いつくまま様々な事について執筆してきたが、振り返って見るとその時々々の出来事に関する理不尽な事に対する怒りにも似た感情の吐露が多かった。読者の皆様には不愉快な思いを抱いた方もおられると思いますが、お許しをいただきたい。最近では洋の東西を問わず社会全体に利己主義的な風潮が顕著になってきた。来年こそCOVID-19が終息し、夢を語れる明るい年になるよう祈念して、最後の原稿といたします。

(青)